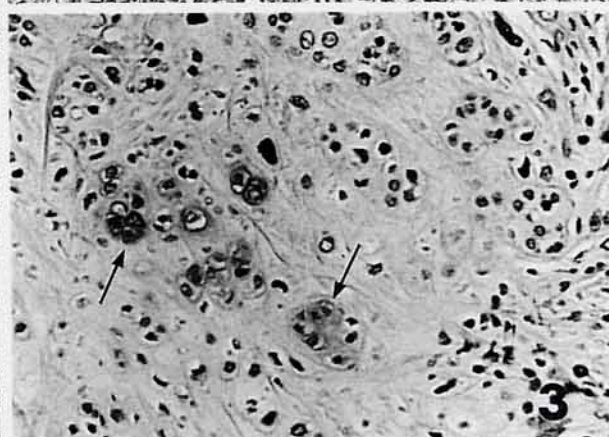
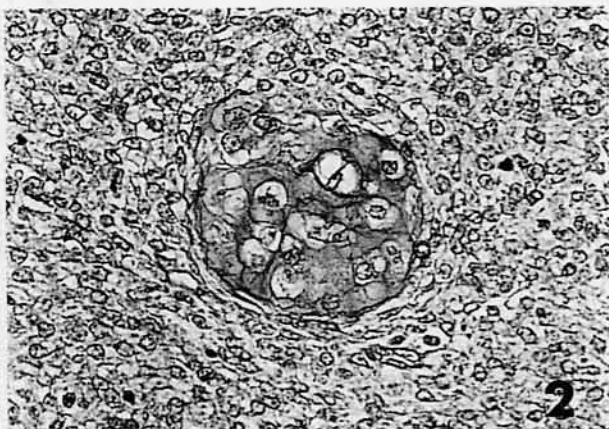
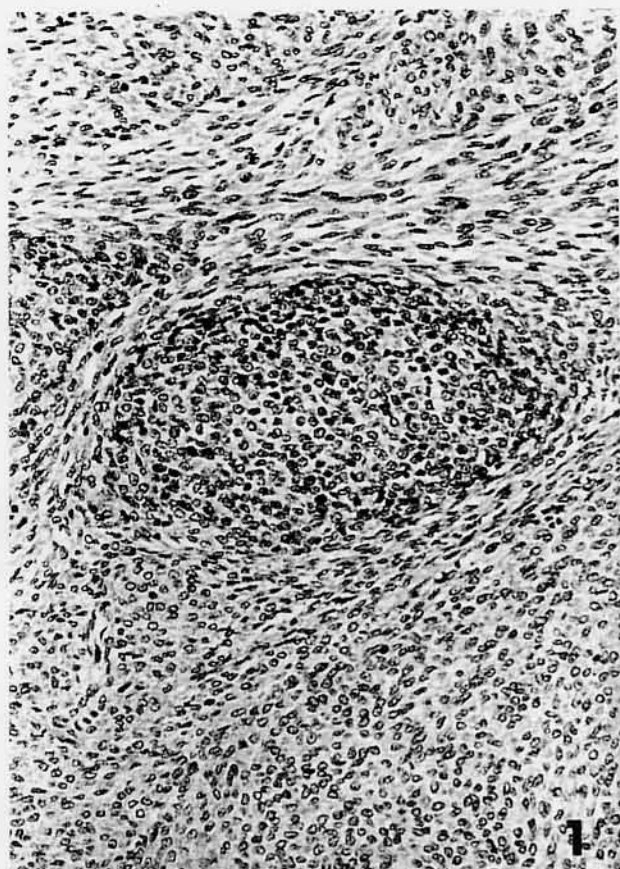


犬の皮下腫瘍

山口大学農学部家畜病理学教室 出題 第37回獣医病理学研修会標本No.689



動物：犬，ビーグル種，雄，9歳，体重16kg。

臨床事項：1995年秋頃右頸部皮下の結節に気づいた。1996年6月5日に外科的に腫瘍を摘出した。

肉眼所見：腫瘍は右頸部背側肩甲骨前位皮下に位置し，当該部の皮膚は立陵状に隆起しており，皮膚表面の構造はよく保たれていた。腫瘍と頸椎骨や肩甲骨との連絡はなかった。腫瘍の大きさは径約4cm，球状で，充実し弾力のある硬度を有し，可動性があり，周辺組織とはよく区画されていた。腫瘍の表面は結合織様の膜に覆われており，断面の色調は全体に灰白色で，大小円形の透明感を有する白色部が少数散在性に認められた。

組織所見：本腫瘍は円形～卵円形核と疎で境界不明瞭な細胞質を有する比較的均一な大きさの細胞が密在し，暗調に見える部分と，それらの周囲に円形～紡錘形核と好酸性豊富な細胞質を有する明調な紡錘形細胞の増殖部とから構成されていた(写真1，HE，×210)。紡錘形細胞は束状～渦巻き状に増殖し，一部には核異型と明瞭な核小体を有する単核～多核巨細胞を混じた多形性の目立つ細胞増殖部や血管周皮

腫様増殖部が認められた。腫瘍内にはところどころに粘液腫状の部分と軟骨基質をもつ腫瘍性軟骨組織が認められた。細胞密な暗調部では有糸分裂像の多い未分化細胞集団の中に，一般に移行像に乏しい比較的成熟した軟骨島の形成があった(写真2，トルイジン青，×370)。紡錘形～多形細胞増殖部の一部はS100蛋白陽性を示した(写真3，矢印，酵素抗体法～ヘマトキシリン，×190)。暗調部の細胞の一部と紡錘形細胞の大部分がビメンチン陽性であった。腫瘍辺縁部には結合織の増殖と硝子化が見られた。

考察および診断：本例は軟骨形成を特徴とする腫瘍で多彩な細胞～組織形態を示した。未分化間葉系細胞増殖部に比較的分化した軟骨組織が形成されていたこと，成熟軟骨細胞がS100蛋白陽性を示したことから，血管周皮腫様構造が認められたことから，犬の頸部皮下の骨外性軟骨肉腫と診断した。また上記の組織所見から，ヒトの亜型(通常型，粘液型，間葉型)のうち間葉型に分類されると思われる。なお犬では，皮下の軟部組織に発生する骨外性軟骨肉腫は極めて稀である。